蛙鳴

小嶋孝三郎

一

鬼灯（ほほづき）を口にふくみて鳴らすごと蛙はなくも夏の浅夜を　長塚節

夏の浅夜に鳴く蛙を歌ったものである。蛙の声を表現するのにげっげっげっとかころころころとか、あるいはくっくっくっといった擬声音を用いることがあるが、それは平凡であり、あまりにも幼稚で芸がなさすぎる。この作者は「鬼灯を口にふくみて鳴らす」ように鳴くというたとえによってその声の音質音感を表わしている。これによって擬声音を用いるなどよりもずっとよく蛙の声が感じられるのである。うまいたとえであると言ってよい。云々。（木俣修「短歌の鑑賞」）

さて、右の鑑賞文の中で木俣氏は、右のような歌に安易に擬声音を用いることは平凡幼稚であり、「芸がなさすぎる」。従って、右の歌のように「たとえによってその声の音質音感を表わ」せば「擬声音を用いるなどよりもずっとよく蛙の声が感じられる」といわれるのである。今この点について少し考えてみたい。

ところで、右の歌の「鬼灯を口にふくみて鳴らす」という直喩は、たしかに適確な表現で、これがこの一首の全てであると云ってもよかろう。従って、これを例えば、同じ作者の「からからに蛙はなき」（「長塚節歌集」明治三五年作）と比較しても、又次のような諸歌の用例に徴してみても、明らかにそのすぐれていることが頷ける。

春の夜を茶を挽き居れば垣つ内池のかはづがこほろ鳴くかも　（「左千夫歌集」明三六）

こほろ鳴く蛙が声にこころ乗り臼挽きやめて独歌おもふ　（〃　）

こもりくの谷の若葉の繁り深み蛙ころころ鳴く声さびしらに　（〃、明四一）

宵あさくひとり居りけりみづひかり蛙ひとつかいかいと鳴くも　（斉藤茂吉「赤光」明四二）

かいかいと五月青野に鳴きいづる昼蛙こそあはれなりしか　（〃「あらたま」大五）

ころころころろ蛙が鳴けば父母は為事せはしく思ほすならむ　（古泉千樫「青牛集」大八）

背戸の田に水たりぬらむりうりうと今宵さやかに蛙鳴き居り　（上田英夫「草路集」大九）

しまらくを音をたえつつころころとひとつが鳴けばもろ鳴く蛙ら（原阿佐緒「死をみつめて」大一〇）

はざまには水田あるらしかいかいと闇のそこひに蛙は鳴くも　（岡野直七郎「谷川」

大一一）

ころ、ころ、苗代の蛙！愛しいこゑが私の感情を幼くする浅夜　（嘉納とわ「草にゐる」昭六）

いのちこそかなしかりけれかろかろと遠田の蛙こゑすみにすむ　（「染谷進歌集」昭一七）

――以上いずれも作年代、以下同じ――

又、次のような詩や小説の用例でも、平凡幼稚の評をまぬがれないであろう。

春になる。霞み初める。
村の沼で
或る晩、ころ。
初蛙。
ころころ、和する蛙。
さて追追と数が殖え、
ころころころころころと鳴く。
上には
日がけぶる。
ゆらめく青い蝶一つ。
めでたや。　（森林太郎。〃静物〃大四「沙羅の木」）

雨のいつぱいにふる夕景に、
ぎよ、ぎよ、ぎよ、ぎよ、ぎよ、と鳴く蛙。
（萩原朔太郎、〃蛙よ〃大六「月に吠える」）

あたりで蛙がけけろけろと鳴き出した。
月の夜が星の夜に代つて、而かも月は暈をきてゐる。
（岡本かの子「女体開顕」）

但し、これが例えば、次のような童謡の場合なら、十分その効用を認められていることは今更云うまでもない。

鳰の浮巣に灯がついた、
灯がついた。
あれは螢か星の尾か
それとも蝦の目の光り。
蛙もころころ啼いている。
啼いている。
ねんねんころころねんころよ
梟もぽうぽう鳴き出した。
（北原白秋、鳰の浮巣）

月夜の田んぼで
ころころころと鳴く笛は
あれはな
あれは蛙の銀の笛。
ささ銀の笛。
（斉藤信夫、蛙の笛）

二

鳥獣虫類などの啼き声の描写は古典作品の中にも屢々みられ、時代によってその描写の密度にかなりの差異がうかがわれるが、あえていうならば、擬声音は作者の感覚に依存しているために、やゝもすれば主観的な印象描写に陥る弊を見逃すことは出来ない。個々の作者がたとえどのように精到を期したとしても、限りない自然界の事象を限りある人間の言語音に飜訳しなければならないのであるから、そのこと自体に既に無理があって、その点だけから云っても、描写と同時にも早対象そのものと非常に遠いものになってしまう。この点、ロッシーニのウイリヤムテルの序曲の嵐の描写が、あくまで音楽そのものであり、決して嵐そのものでないのと同様である。このようなことを云えば、厳密に云って擬音はあくまで擬音であり、対象そのものを收めるためにはテープ・レコーダーを用いる以外にはない。もっとも、放送などで用いる擬音技術は非常に発達しているし、又同じ人間の場合でも、猫八のような天才的技術者の物

真似なら話は別であろう。

右にも述べたように、擬声音による描写の主観性ということを次の文章が非常によく表わしているので左に掲げてみよう。

暁方四時に眼覚めた。戸外は明るくなっており、二、三種類の小鳥が鳴いている。その一つはキョ、チョッ、チョッ、キョ、チョッ、チョッレイと聞える。

（中略）

五時半に、かおるは床を離れ、小屋の横手の小川で洗面するために階下へ降りて行った。

建物を出たところで、いま起きたばかりらしい娘さんと顔を合せた。かおるはキョ、チョッ、チョッレイと鳴く鳥が何であるかたずねてみた。

「ほら、聞えるでしょう、ね」

娘さんはちょっと耳を傾けるようにしていたが、

「ああ、チロリン、チロリン、リンリンリンですか」

と言った。なるほどそう言われてみると、そう聞える。そして、かおるはそれがミャマという鳥であることを教えてもらった。ミャマのほかにシジュウカラも鳴いていた。この方はチイ、チイ、チィとやかましく鳴き立てている。（井上靖「氷壁」）

右の四十雀のチィチィチィチィは別として、同じミャマに対するかおると土地の娘との間には、全く相異たる聴覚的描写がなされている。

このように、擬声音による描写の主観性ということは、さきに蛙の鳴き声によってもその一部を掲げたようにその例をあげれば全く枚挙に遑がない程であるから、こゝではそれらの用例をいちいちかゝげる手数を省く。一体、それなら、擬声音による描写の客観性ということは、果してあり得ないのであろうか。

そこで例えば次のような例はどうか。

さっきから、小鳥島でふくろうが鳴いていた。」五郎助」と言って、しばらく間を置いて、「奉公」と鳴く。（志賀直哉「焚火」）

これも又古来極めてその用例が多く、こゝでいちいちそれらを取りあげるまでもないと思うが、この種のいわゆる「章句仮充法」（川村多実二「鳥の歌の科学」）は、鳥の鳴き声に対する客観性を附与する一方法ではある。鶯の「法々華経」、杜鵑の「天辺かけたか」、雲雀の「一升貸して二斗取る、利取る利取る」「利に利に食う、利に利食う、後や流すう」「日一分、日一分、月二朱う」等々。

しかしながら、こゝにいう客観性とは対象の聴覚的描写そのことに対する客観性ではなくて、聴覚的対象を意味のある短かい章句で飜訳する方法であるから、こゝでは早一面において感性（感覚）から知性（観念）に移行させている。従って、このことは、対象を言語記号としてその社会性を附与したにすぎず、このような場合の客観性とは、客観的描写ということから寧ろ遠ざかる可能性も多い。

そこで川村博士は、「毎朝わが頭の上で鳴くスズメの声を、自身でたしかめてもみずに、スズメはチューチュー鳴くものときめているのが日本の児童である。」と前置きして、

スズメの鳴き声には、仲間に危急を訴えるジュクジュクとか、ヒナが親を呼ぶ時のシリシリとか、いろいろ変わったものもある。

が、元来チェップというのが基本文句で、個体により終わりのプがひびかないのもある。季節が春になり良い配偶者を見つけて営巣にかかろうとする雄スズメは、チェップチェップと繰り返して鳴く時もあるが、むしろチェップが変じてできた替え文句、すなわちチー、チュー、チー、チャン、チユン、チョン、チン、ジユン、チリー、チユリー、ジユリー、チヨチ、チユウイン、ジユウイン、チーラムなどを縦に連ねて作つた長い求婚歌を歌うのが普通である。京都の一例を示せば、チエップ、チーラム、チヨチ、チヨン、チー、ツイーン。と云われ、「スズメの声にも地方によつて巧拙の差がみとめられる」（朝日新聞、昭三五・二・二一朝刊、スズメの恋愛歌）と結んでいられる。スズメの歌の巧拙なら致し方ないが、そうした歌を聴く人間の聴覚や又その聴覚による音声描写や、更には又一首の歌なり詩なりに、優劣鋭鈍巧拙の差があろう。

　鳥の鳴き声そのものを科学的対象として数多くの資料を蒐集し研究している人々や、一方、中西悟堂の「野鳥記」にみるように、詩人や作家の文学作品の中にあらわれる擬声音を精査するとき、今更のようにわれわれはその描写の適格性に驚かされるのである。

三

　蛙変じて鳥となる。話を元に戻してみよう。

　聴覚的描写における客観性ということは、すぐれた学者や詩人・作家などの、精到な調査研究乃至鋭敏な感覚によって、将来、科学的にも又文学的にも益々高められることであろう。

るるるるるるるるるるるるるるるるるる
（草野心平、春殖、「第百階級」）

rrri
ririri
rrri
ririri
rrri
rrri
ririri
rrri
rrri
rrri
ririri（〃Let me sleep, too「定本蛙」）

　右はいずれも草野心平の有名な蛙の鳴き声の擬声音による詩である。他にも「ぐるるっ　ぐるるっ　いいいいいいいいいいいいいいいい」とか、「ぎやわろっぎやわろっわろろろろりっ」などを繰り返した「誕生祭」という詩があることは衆知の通りである。又、草野氏だけでなく、蛙の鳴き声を現代詩歌や小説の中で擬声音によって描写したすぐれた用例は他にもかなりあるであろう。

　最後にはじめの歌に戻って、同じ作者の同じ年の作品を上げて較べてみよう。

さわやかに鳴くなる蛙たとふれば豆を戸板に転ばすがごと（「長塚節歌集」）

　比喩的描写か聴覚的描写か、どちらがより文学的表現たり得るか、などという問題は、右の平凡幼稚な歌をあげるまでもなく、も早論外であると云えよう。いずれにしろ要は対象描写における感覚の密度というか、要するに自然界の妙音をどこまで深く鋭くキャッチするかが問題であり、それが又一篇の詩なり歌なり文章の中でどれだけ見事に生かされているかというところに表現価値が云々し得るのではなかろうか。

（三五・四・一四）